

保育における片手使い人形の研究

——大正末期から昭和20年代に至る人形劇の人形について——

松本尚子

A Study of the Hand Puppets at Kindergarten

—— Since 1920s to 1940s ——

Naoko MATUMOTO

はじめに

人形劇に使われる主な人形は、使い方によってだいたい次のような呼び方をされている。1本の指にはめて使う小さな指人形をはじめ、片手使い人形、両手使い人形、糸あやつり人形、棒使い人形、抱え使い人形、そして人が中に入り込んでぬいぐるみのような着ぐるみなどである。立体的なものを挙げてもこれだけたくさんの種類がある。この他に平面的なペーパークラフト、影絵などの人形もあるから、人形劇に使われる人形の種類はさらに数を増すことになる。

一方、こうした人形を作るための材料も、現在では非常に豊かになった。頭（かしら）の材料では、発泡スチロールやウレタン、カラー軍手や化繊綿、紙粘土も真っ白で乾くととても軽くなるものが市販されている。衣装用の布地も、伸縮性のあるジャージや毛皮のようなボア、色とりどりのフェルトも市販され、また、作り方の本も数々出版されているので、誰でも手軽に作れるようになった。

さらに、自分で作らなくてもセットになった人形が、簡単に手に入る時代となっている。

このように、人形劇の人形は極めて多彩になったが、ではこれまで保育に使われてきた人形劇の人形は、いったいどんな形のもので、どんな材料を使って作られてきたのであろうか。これを明らかにすることが本研究の目的である。本論では特に、保育に初めて人形劇を導入し、その普及に力を注いだ人々が使った人形¹⁾に注目した。

まず、保育における人形劇が、誰によって導入され、どのように普及していったのかについて、ここで簡単にまとめておく。

わが国には、伝統的な人形芝居がたくさん残っているが、保育に人形劇が初めて導入されたのは、大正12年のことであった。東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）附属幼稚園の主事であった倉橋惣三（1882～1955）が、欧米視察の途次で出会った人形劇に影響をうけ、帰国後、附属幼稚園の保姆たちと共に「お茶の水人形座」と称して、園児たちに見せたのが最

初である。²⁾

同じ頃（大正13年）、東京・芝の増上寺託児所（現明德幼稚園）の主事内山憲尚（1899～1979、のち聖美幼稚園初代園長）も、買い求めたり自作した人形を使って、園児たちの前で人形劇を演じていた。彼が昭和2年に出版した『絵噺と人形芝居』（法蔵館）は、日本で最初の、子どものための人形劇の単行本とされている。³⁾

一方、東京・亀戸幼稚園初代園長であった山内勇仙（1893～1959）は、昭和7年より独力で発行した月刊誌「保育研究」（1000部印刷して約700部発送、昭和16年9月まで通算113号を発行）、および講演会・講習会を通じてその普及に貢献した。⁴⁾

また、松葉重庸氏（1905～）は、学生時代より帝大セツルメントにおいて子どもたちと触れあい、昭和11年秋頃より「保育問題研究会」に参加して人形劇の実践研究を開始、戦争中より「移動人形劇場」の活動（昭和16～27年）を行った。彼は昭和28年より夫人と共に人形を作り、近所の幼稚園・保育園に向けて頒布の仕事を始めた。松葉氏の人形はやがて保育用品販売会社の学研などのカタログに載り、全国の幼稚園・保育園に普及していったのである。⁵⁾

彼らの使った人形は、いずれも片手使い人形であった。

そこで、彼らの残した文献及び実物の人形を資料に、その形や材料について調査を行った。

1. お茶の水人形座の人形

東京女子高等師範学校附属幼稚園の倉橋惣三と保姆たちが、最初に使った人形は倉橋がヨーロッパより持ち帰ったものか、最初から保姆の手作りのものかは記録が見つからず、雑誌「幼児の教育」にも記されていないので不明である。

そして、倉橋が人形劇を導入した頃は「ふざけたことをする位に思った人もあったかも知れない」⁶⁾ という時代であり、まだまだ人形劇が受け入れられていなかった。また次のような心境も述べている。⁷⁾

必ずしも一々やかましい理論が基礎になって考案せられた譯ではない。子どもの喜ぶようにといふのが、最高最低の基準であったに過ぎない。ところが、どうだろう。あの、初めて、お茶の水の幼稚園の遊戯室で、私の小さい舞臺の幕（それは高島屋呉服店の某君の寄贈であった）を開けたときの、幼児達のあの喜びといふものは……。私が、人形芝居を凡ての幼稚園に是非普及させたいと考へたのは、その初興業の幕をしめた直後のことだった。

しかし、最初のこの舞台も人形も関東大震災によって園舎と共に焼失してしまう。倉橋は大正13年12月から幼稚園主事の仕事から離れてしまうが、保姆たちはその後も身近な材料を使って人形を作り、自ら脚本を書いて子どもたちに見せていた。

写真1は、雑誌「幼児の教育」第30巻1号（昭和5年1月）に掲載されたものの転載であ

る。復刻版からの複写なので鮮明さに欠けるが、この写真については同号に、お茶大附属幼稚園の保母菊池ふじのが書いた「人形芝居」という文章の中に以下のような説明がある。



写真1 お茶の水人形座の人形

口繪の顔ぶれの中の箱人形は、九重の空箱でこしらへたものでございます。誠に不完全な、それで大變印象的で、容易く

出来る人形でございます。鼻を畫用紙で三角に貼りつけ、目、口等を描き入れ布の帽子をかぶらせたわけでございます。——中略——
着物は劉の所をえぐり、袖や胸は洋服のワンピースの様にしたままでございます。手は、つけてもよろしい（この場合袋にして置く方可）つけなくてそこから使ふ人の指を一寸出してもよろしいと思ひます。着物の地質は、ラシャとかアストラカンとか云ふ厚地のものが使ひ易うございますが、有り合せのキャラコでもネルでもメリンスでも絹でもよろしうございます。色合は、舞臺の上に見るのですから、原色と云つた様な印象的なものがいゝと思ひますが併しこれもそう大した吟味もいるまいと思ひます。

それから卵人形、これは卵の一端に小さい穴をあけ、そこから中の白味黄味を出してしまひ、それに、一分位の幅に切つたガンピ紙を三、四重に縦に貼つて目、鼻、口を描き入れたのでございます。ガンピは薄くて丈夫でよろしうございますが、求める便の悪い所では半紙でも結構だと思ひます。内と外と兩側から貼れば丈夫だそうでございますが、内側に貼るのはなかなか六ヶ敷うございますので外側にだけ貼つて居ります。そのせいか一寸古くなりますと脆くて床へでも落せば破れてしまひます。それに近頃ねずみが出て食べましたので、先頃までは澤山あつたのですが、取り出して見たら、あんな貧弱なのがたった1つ満足に残つて居ただけでございました。——中略——

布人形。あれは頭の前と後とを縫ひ合せ、中に堅く綿をつめ（頭を支へる指の、は入る餘地あらしむ）着物を縫ひつけたのでございます。髪の毛も眼、鼻、口も簡単な刺繍で出来て居ります。

それからあの殿様人形は臺灣の方からいただいたのでございます。臺灣では、頭だけ又は着物を着せたりして賣つて居るのだそうでございます。殿様みたいな顔をしたのやその他いろいろがあるのだそうでございます。

ピノチヨは店頭のを求めたのでございました。

お猿さんをご承知のドイツ製のもの。

引用文中の「九重」とは仙台の銘菓のことだろうか。写真1を見ると左寄りの箱人形は、少し頭がつぶれてしまっている。その下おじぎをしているように見えるのが卵人形と思われる。

左の幕をおさえているようなのが「殿様人形」、これは保姆あるいは子どもたちが名付けた呼び方であろう。本論には載せていないが、同号にもう1枚掲載されていた人形劇の写真を見ると、髭をはやし弁髪をつけているのがわかる。布人形もあまり厚みのない頭となっている。ここに写っている人形は頭の大きさがまちまちであり、その材料も別々だが、保姆たちが手に入るものを工夫して人形劇を演じていたことが窺える。

また、同誌第31巻12号（昭和6年12月）には、及川ふみ保姆が書いた「猿蟹合戦」の人形の作り方を載せている。これは同年11月に、託児所の保姆たちを対象に講習したものであると記されている。この講習会には、亀戸幼稚園の山内勇仙も受講生として出席していた。

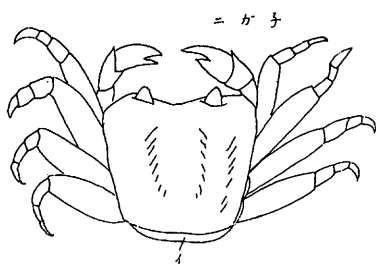


図1 「猿蟹合戦」の小蟹の頭

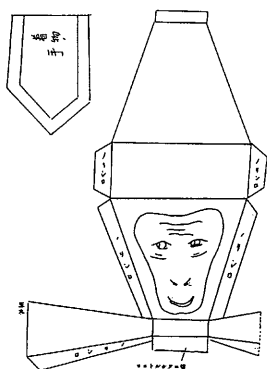


図2 「猿蟹合戦」の猿の頭・手

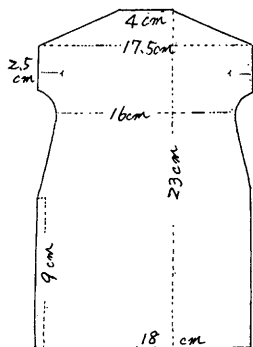


図3 「猿蟹合戦」の人形の衣装
数字は読み取りにくかったので
筆者が記入

これによると、頭の材料は主に画用紙、模造紙、綿を使っている。またここには、親蟹、子蟹（図1）、蜂、猿（図2）、栗の実物大の絵と、衣装にする布地の裁ち方（図3）が載っている。

そこで、「幼児の教育」に載った菊池・及川の記述をもとに実際に作ってみることにした。

まず、箱人形は空箱の代わりに、適当な大きさ（写真1のような立方体）の箱を厚紙で作り、画用紙で三角の鼻を付け、頭に布の帽子をかぶせた。首管は『幼児のための人形芝居脚本』（菊池ふじの・徳久孝子共著、昭和5年7月フレーベル館）の中に書いてあったとおり、画用紙を二重にまいて筒にしたものを使い、これに直接衣装を縫いつけた（写真2）。

卵人形は、雁皮紙を探して購入、4～5mm幅に細長く切り、水で薄めた糊で三重に貼った。内側にも貼ろうと試みたがうまくいかなかった。そこで、前出の文献に「ガンピ紙を貼った上から胡粉を塗って目鼻を描き入れますと、尚一層綺麗」とあったので、チューブ入りの胡粉を買って塗ってみた。しかし、濃度が高すぎたらしく、乾くと表面がひび割れた状態になってしまった。胡粉の取り扱いが難しい（写真3）。

箱人形も卵人形も、衣装は及川の記述にあった通りの大きさに、綿ブロードの生地を使って作成した。手は同じ生地を使い、写真1を真似て手先に少し綿を入れた。卵人形には毛糸の帽子を編んでかぶせた。

また、猿と蟹も試作（写真4）してみたが、首管がないの



写真2 試作の箱人形

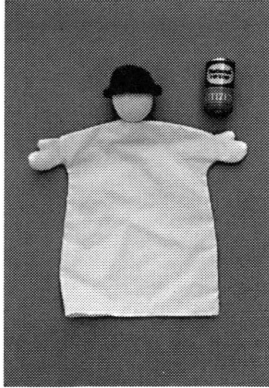


写真3 試作の卵人形



写真4 猿と小蟹の人形



写真5 フレーベル館が売り出した人形
頭は桐の木を削ったもの

で頭にそっと指を入れないと破れてしまいそうに感じる。いずれも取り扱いや保存方法に注意が必要であろう。しかし、実際に作ってみることで限られた材料でとにかく人形を作ろうとした当時の苦勞を感じることができた。

昭和5年12月になると、フレーベル館が菊池・徳久の書いた脚本に合わせた人形(写真5) 8)をセットで売られるようになった。当時の値段は1セット(35体)で17圓だった。広告によれば「帝展新進木彫家、尾崎一草氏の製作に係る原型を以てし、童畫家藤澤龍雄畫伯の扮装意匠」で、「材料は輕木を用ひ」ていた。松葉重庸氏の話では、戦前フレーベル館でこの人形を見せもらったが、頭に指先しか入らず、使いにくい人形と感じたとのことだった。

やがて、千葉県女子師範学校附属幼稚園では「コドモ座」、東京・中野の宝仙寺・感応幼稚園(園長青柳義千代、現宝仙学園幼稚園)では「おともだち座」、大阪・浜寺の双葉幼稚園では「フタバ座」と称して、園長と保母による人形劇が演じられるようになった。

2. 内山憲尚の人形

倉橋より1年遅れたものの内山憲尚も保育における人形劇の先駆者といえる。彼は幼稚園の中で演じて見せただけでなく、口演童話研究の仲間と共に人形劇団「子供の人形座」を結成(昭和6~18年頃まで)し公演活動行っている。また「東京人形劇研究所」を設立して講習会(先述の青柳義千代も講師だった)も行っており、意欲的に人形劇の普及活動をした人である。

彼についての研究を始めたとき、資料を拝借するため聖美幼稚園を訪ねた。彼が自作した人形が残っていないか尋ねたとき、出して下さったのが写真6・7と図4の人形である。それはいつでも子どもたちが使えるようにと保育室に置いてあり、他のたくさんの人形と一緒に箱の中に入っていた。

頭が紙粘土で作られている人形が3体と市販の頭に手作りの衣装を付けた人形が1体。頭の大きさは鶏卵ぐらいで、髪の毛や顔は描き入れてある。内山が昭和8年に出版した『指遣人形

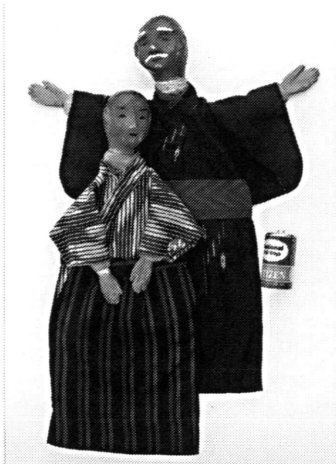


写真6 内山憲尚の人形①



写真7 内山憲尚の人形②

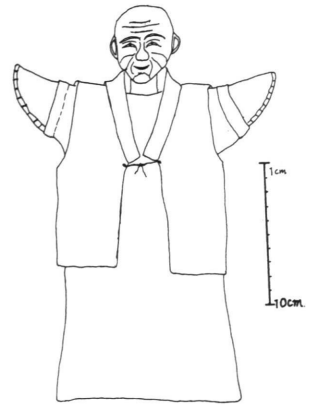


図4 聖美幼稚園にあった頭が市販の人形

1950年
張一平画
1970.5.22

劇の制作と演出』(日本童話協会出版部)の中に紙粘土の作り方が記されているので引用する。

- (a) 先ず新聞紙を出るだけ小さく、(五ミリ位)切る。普通の頭なら新聞紙二枚で一個の見當。幼稚園や、五六十名に、見せるものなら新聞紙1枚で頭一個の割合。
- (b) それを鍋の中へ入れ、水をこげつかない程度に入れる、それでなるべく炭火で二三時間煮る。
- (c) それを取り出してすり鉢に入れて、出来るだけよくする。要するにこの工程は紙の中の繊維をほこすのである。
- (d) その中へ髪洗ひ粉(安いもので粘土が主なもの)を新聞紙五枚について四分の一か半袋入れる、ゴムのり(ひめのり)または膠を入れる、のりなら五枚について小鐘一個の割合に入れて、手でよくねり合わせるのである。すると粘土様のものが出来る。この際髪洗ひ粉が澤山入りすぎると、頭が重くなるからギニョールとして指が言ふことを聞かなくなる。
- (e) 豫め、自分の人差指の太さ位で先を細く尖らせた丸い木を作って置く、その先へ粘土の様になった新聞紙の煮たものをつけて人形の頭を思ふまゝに作り上げるのである。
- (f) 出来上ったら、そのままで乾かすのであるが、丸棒の下へ錐で穴をあけて置いて、それを釘に差す様にすると一時に何個でも乾かされる。乾かすのは日光で結構、夏なれば二三日冬ならば三四日干せばよい。それから半乾きになった頃に、顔のイビツになったところ、鼻の恰好等を修正する。
- (g) すっかり乾いて仕舞ったら、丸棒からぬくのであるが、半乾きの時に丸棒を少しゆるめて置かないと、喰付いて仕舞って、とれなくなる。
乾いたものは木よりも固いものになってしまつてゐるから、あまりひどい凸凹は小刀でけづる、ペーパー(紙やすり)の粗いものをかけて、すっかり丸味をつけて更に細かいもので仕上げをして仕舞ふ。
- (h) すっかり仕上がったら胡粉に少し膠を入れて、頭を塗るのである。これが乾いたら、その上へ色をつけ顔を描く、これはポスターカラー又はどろ繪具(膠を少し入れる)などがよい。
- (i) お爺さんお婆さんの白い髪は白木綿糸お士などの黒い髪は黒の木綿糸を糊でつけて西洋人や鬼の赤いちぢれ毛は太い毛糸をほぐしたものである。

この新聞紙を使った紙粘土の作り方は、内山が開発したものだ言う。戦後に出版した『一人で出来る人形劇脚本集』(昭和24年、片井商会出版部)の中では、新聞紙は鍋で煮なくても四、五日水に浸けておけばよいとされる。それ以外は、昭和8年と昭和24年の文献を比べても、人形の作り方に大きな違いはみられなかった。

残念ながら、引用文中の「髪洗ひ粉」どんなものなのか、まだ未調査のため、不明である。

手は、桐の木を削って作ってある。手管は古ハガキを斜めに半分に切り、使う人の指に合わせて巻き付け糸で縛る。その上からさらに和紙を貼っている。

衣装は、まず白い木綿の布地で図5⁹⁾のような「胴」¹⁰⁾をつくり、その上から服を着せている。これは内山の人形の特徴で、他の人形は、頭あるいは首管に直接衣装を縫い付ける方法である。彼は「洋服の場合はこれでもよいが、和服の場合にはこのやり方では着物を着ているといふ感じが出ない。面倒でも胴と着物を別に作って貰いたい」¹¹⁾と書いている。但し、実際に衣装を縫っていたのははず夫人であった。

胴が出来たら図6¹²⁾のように裏返して、頭、手を糸で強く縛ってつなげる。上から着せた着物の裾と胴の裾は、縫い合わせてあつて使うときに手を差し込みやすくしてある。

拝借した写真6. 7の人形の衣装も図5とほぼ同じ大きさであり、胴が着せられていた。また、「子供の人形座」の第一回公演の時(昭和7年1月)に撮したという写真¹³⁾を見ると、拝借した人形と同じくらいの大きさの人形を使っていたことがわかった。写真6の袴をはいた人形の衣装は、『一人で出来る人形劇脚本集』の178ページに掲載されたものと同じなので、この人形が作られたのは、昭和24年頃ではないかと推定できる。

図4の市販のものと思われる人形の頭は、鼻先が少し欠けてしまっているが、その欠け口を見ると細かい木屑が固まったものであり、型取りで量産された頭と考えられる。但し、いつ頃のものなのかわからない。

内山は、昭和10年には中野保姆養成所(現宝仙学園短期大学)、横浜聖徳保姆養成所、戦後は駒沢大学や鶴見女子短期大学の講師となり、保育者養成にもあたるようになった。

3. 山内勇仙の人形

小さなトランクに入った人形が亀戸幼稚園に残されていた。数は多くないが、戦争中には疎開先の飛騨高山に運ばれ、また数度の園舎改築の際にも紛失することなく保存されていた。

人形の写真は、本学研究紀要の第32集にカラー写真で掲載したので、本論には山内昭道氏(本学教授、勇仙の長男、現

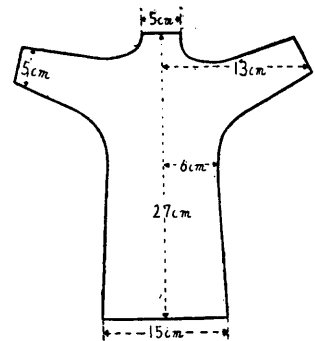


図5 内山の「胴」の大きさ

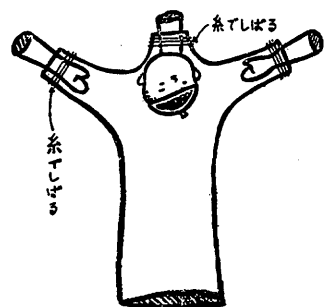


図6 頭と手を胴につなげる方法

園長)の描いた図7・8を載せる。

月刊誌「保育研究」を見ると、第1巻10号(昭和7年10月発行)から「人形芝居講座」の連載を始めている。その講座の五回目・六回目に人形の作り方が載っている。それによると彼は、素人が作るのだからなるべく簡単に、「手技」の材料を用いて誰でも出来る方法を、またその方が普及のためにもなるのではないかと考えていた。

残されていた人形のうち、頭が紙でできていた雀は、この講座に図解(図9)されていたものとそっくりである。作り方は「図解の様に同じものを二つ切って、糊で貼りそれぞれ色紙を貼れば目的のものになります」と説明されている。ただし実物の人形には、頭に少し綿が詰められている。

布で作られた動物(狸か?)の人形も図10と同様である。作り方は次のように記されている。

自分の欲する獣の型紙を造って、二枚同じきものを布地からとり、縁を縫ひ合わせて、中へ綿をつめます。所謂縫ひくみであります。

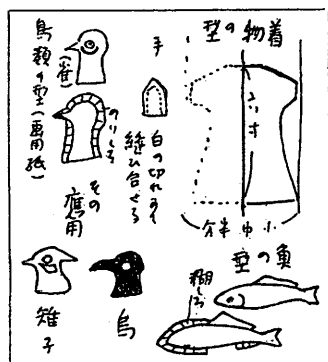


図9 人形芝居講座(五)の図「保育研究」(S8.2月号)

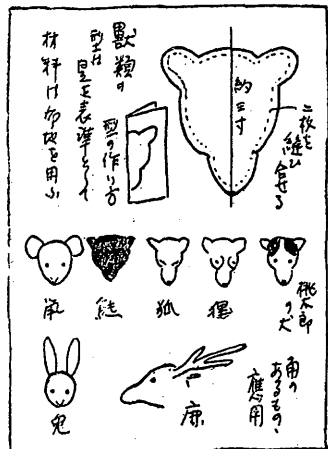


図10 人形芝居講座(六)の図「保育研究」(S8.3月号)

綿を入れるのにかたく上手に入れるといふ恰好になりますから、秘傳は綿の入れ様一つであります。乃で出来上がった物にそれぞれ彩色を施し、鼻目、口等を書き入れます。獣の特長に依って、顔形も異なりますが、目の如何で、同じものでも變化いたしますからよく御注意下さい。圖解の狸と狐とは、同じ形でありながら目一つで、狸ともなり、狐ともなります。

人物の人形については、最も簡単な方法として「お手玉を作ると同じ方法で袋をつくり、中へ綿をつめればそれでいふ」としている。図8の人形の頭も、長方形の布の両端を縫い合わせて輪を作り、中に綿をつめ、上下を縫い縮めて作つてある。薄い画用紙をまるめた首管がついているが、雀や狸には首管がない。手はお茶の水人形座の及川保母と同じで、布で袋状にできており、

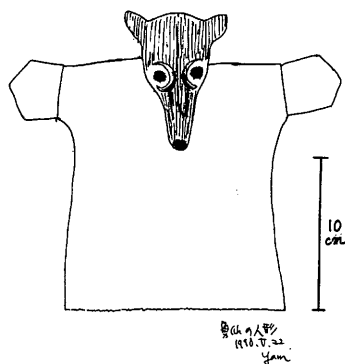


図7 山内勇仙の人形①

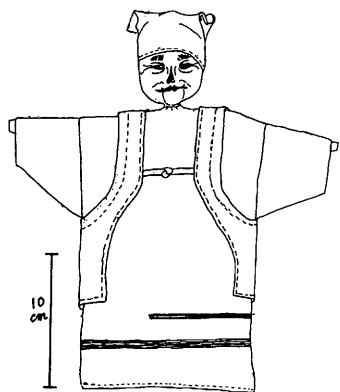


図8 山内勇仙の人形②

自分の指を入れて使う。

衣装は図7. 8. 9を見てもわかるとおり、本論で取り上げた人形の中でもっとも小さい。また、衣装を縫っていたのは内山の場合と同様、妻の千代子だった。

「保育研究」をみると、山内の人形劇普及活動が意欲的に行われていたのは特に昭和7、8年であったことがわかった。残されていた人形は、山内勇仙と共に講習会のため、日本のあちこちに、そして朝鮮・満州にも出かけていった人形と思われる。

彼は、昭和19年より飛騨高山に疎開するが、戦後、焼け野原になった亀戸に戻り、よしずで囲っただけの園舎で保育を再開。やがて内山憲尚・青柳義千代らと共に私立幼稚園の組織運営に力を入れるようになった。

彼は園長をしながら貞静学園、聖徳学園、目白保育学校（現東京教育専門学校）、駒沢学園で、内山と同様に保育者養成にあっていた。

4. 松葉重庸氏の人形

松葉氏は生涯に渡ってずっと人形劇にかかわってきた人物である。大学卒業後、東京高等獣医学校で教えながら、城戸幡太郎を会長とする「保育問題研究会」（大学の元学長青木誠四郎、初代児童学科長山下俊郎も会員だった）に参加、この頃より妻延子（元婦人セツルメントの保姆）の協力のもとに人形を作り、保問研の講習会や農繁期託児所で演じて見せるようになり、人形劇の実践研究を始めた。

そのきっかけとなったのは、延子の姉がアメリカ人の牧師からもらったという一人の人形と出会ったことである。その人形は、新聞紙をまるめて作った頭に毛糸の髪がついている素朴な手作りの人形だった。

彼はやがて教員をやめ、人形劇に専念するようになった。昭和16年12月セツルメント時代に知り合った管忠道とともに「移動人形劇場」を結成、大政翼賛会宣伝部人形劇委員会の委員となった。移動人形劇場は、軍隊、工場、婦人会、隣組や少国民演劇教室など様々な場所で公演を行い、対象もおとなから子どもまで幅広かった。

空襲によって農林省に保管した人形を焼失してしまうといった事件もあったが、終戦後は、対象を小、中学校にしぼっての巡回公演となった。男女5人の団員は、組立式の舞台と人形を持って、学校から学校へと移動して公演を行った。トラックでの移動公演もあったが、交通手段が乏しかった当時は、ひたすら歩いて歩いての移動が多かったという。

昭和22年文部省発行の国定教科書「國語第五学年下」に「人形しばい」というのが載った。その中に「指人形の作りかた」として6ページにわたり松葉氏の考案した作り方が図入りで示された。これは劇団にとっても好都合となり、公演と共に人形劇の指導も同時に行うことになった。

一方、昭和23年文部省より出された「保育要領」の保育内容に「人形芝居」が入った。こ

のことによって、人形劇が小学校にも幼稚園にも広く普及することになったのである。その後、松葉氏の劇団には、幼稚園からの公演依頼も入るようになった。

では、国定教科書に載った人形の作り方（但し、これを書いたのは栗原一登）を次に引用する。

1. 材料

古はがき一まい。 古新聞二まい。 日本紙。 のり。 絵のぐ。
いたざれ。 古ざれ。

2. 顔の作りかた。

- (1)古はがきを横にまいて、ひとさし指のふとさのつつを作り、のりでとめる。
- (2)古新聞を二まいとも八つに切って、そのうち一まいだけを正方形にする。ほかのはよくもんでのばしておく。
- (3)正方形の一まいにのりをつけてつつにかぶせる。
- (4)首のところだけのこして、もんだ紙にのりをつけないで、上から上からかぶせる。
- (5)首のほうからもかぶせてまるくしてから、細長く切った古新聞にのりをつけてとめる。
- (6)鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞で作ってのりでもとめる。
- (7)日本紙を細長く切って、一まい一まいにのりをつけてはりかためる。
- (8)よくかわかしてから、絵のぐで、顔をかいいたり頭の毛をぬる。

3. 手の作りかた。

- (1)いたざれを、はば二センチ、長さ九センチくらいに切って、まん中にあなをあける。
- (2)あなの両わきを切りこんで、手さきをまるめ、指の線をほる。

4. 着物の作りかたと手のつけかた。

- (1)古ざれを、はば二十二センチ、長さ三十センチぐらいにつきあわせて、図の形に切る。これを二まい作る。
- (2)二まいあわせて、図の点線のところをぬう。
- (3)顔は、着物のすそからさかさに入れて、首を着物にぬいつける。
- (4)手は、手さきのほうをいれて、穴に糸を道してぬいつける。
- (5)顔と手をつけた着物を裏返すとできあがる。

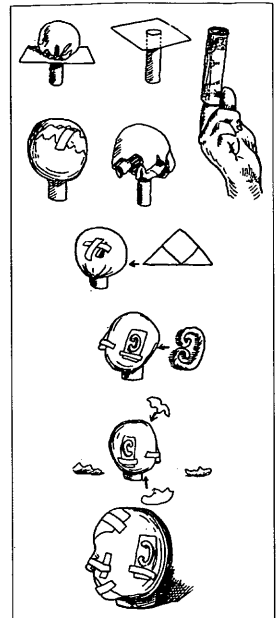


図 11 国定教科書の中の図①

この後に「人形のつかいかた」「舞台の作りかた」が簡単に示されている。

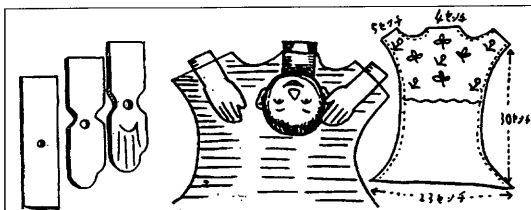


図 12 国定教科書の中の図②

松葉氏が人形の作り方として最初にまとめたものと思われるのは、雑誌「保育問題研究」の第4巻（昭和15年）の1号と3号である。ここに新聞紙をまるめて改良半紙で仕上げる頭の作り方を紹介している。人

形劇に関する単行本では『躍る人形劇』（昭和17年、芸術学院出版部）を初め、昭和17・18年に5冊、昭和23～26年に8冊を出版している。移動人形劇場の活動をしながらも盛んに執筆も行っていった。

写真8、9、10は松葉氏が保管している学校巡回時代の人形である。頭は新聞紙でできているため見た目よりも軽く、70グラム前後（頭のみ）の重さであった。衣装の長さはほぼ40cm、手は頭と同じように古葉書をまるめたものに新聞で形をつくり和紙を貼って仕上げ彩色している。



写真8 松葉氏「移動人形劇場」の人形①



写真9 松葉氏「移動人形劇場」の人形②



写真10 松葉氏「移動人形劇場」の人形の頭

「保育問題研究会」時代の人形は30cm足らずであったらしく、この巡回時代の人形の方が大きく作られている。衣装の肩にあたる部分には、内側に肩パットのような綿を詰めたものが縫いつけられている。

昭和27年、学校巡回の仕事もだんだん依頼が少なくなり、わずかな収入で劇団員をかかえていくことが難しくなって、移動人形劇場は解散した。テレビ放送開始の前年であった。その後は、一人で組立舞台と小さなトランクを持ち、幼稚園・保育所のお誕生会やクリスマス会で演じるようになった。

また、昭和28年頃より人形の頒布の仕事を延子夫人と二人で開始した。最初の頒布用人形は「大ぶた、小ぶた」・「赤ずきん」で、脚本付きだった。頭は新聞紙の紙粘土を使用し、石膏型でかたどって乾燥させた後、和紙を貼り、胡粉をぬって彩色している。手は国定教科書に載ったのと同じ作りである。大きさは、図13、14¹⁴⁾のように全体で30cm前後に作られている。

販売の仕事は、ほとんど延子夫人が担当し、近所の幼稚園から始めた。軌道に乗るまでは、なかなかたいへんだったが、やがて保育用品販売会社の学研のカタログに掲載されるよ



図13 頒布された人形①



図14 頒布された人形②

うになった。量産するために人手も増やしていった。そして松葉氏の人形は、自宅の小さな工房から全国の幼稚園・保育園へと送られるようになっていった。

彼もまた、同年より川村学園女子短期大学に非常勤講師として保育者養成にたずさわることになった。

おわりに

幼稚園で使われた人形劇の人形は、大正末期の導入期から片手使い人形であった。倉橋惣三は、すべての幼稚園に普及したいと考えたが、すぐには広がらなかった。

しかし、演劇界で新劇運動が起こったように、人形劇も大正末期から昭和の初めに「新興人形劇」と呼ばれる運動が起こり、現代人形劇の劇団が次々誕生するといった人形劇ブームが起こった。保育界もその影響を受け、東京女子高等師範学校附属幼稚園の保姆たちが思考錯誤で行っていた人形劇が、昭和5年頃より雑誌や講習会で紹介されるようになり、徐々に広がりを見せるようになった。

この「お茶の水人形座」の人形は、空箱、卵の殻、布、画用紙、模造紙、綿などを使った人形であった。首管は箱人形だけに見られ、他は頭に直接指を入れて使う形になっていた。

お茶大附属幼稚園の影響を受けた山内勇仙の人形も画用紙、布、綿などを使った人形で、はっきりした首管が見られない。人形の手は、お茶の水人形座も山内も布を袋状に縫ったもので手管はない。どちらも幼稚園にいつでもある材料を使い、保育者があまり時間をかけず容易に出来る人形であった。

倉橋と並び保育における人形劇の先駆者といえる内山憲尚の人形は、新聞紙を煮て作る紙粘土を頭の材料にしたものであった。首管や手管がしっかりついて、演じやすくなっている。衣装は、まず「胴」を作ってから着物をきせる方法であった。内山は、人形劇を演じて見せるだけではなく、子どもたちにも人形を作らせ、子どもたち自身が演じることを保育の中でおこなっていた。紙粘土の人形は、完成するまでに日数を必要とするが、空箱や画用紙の人形に比べて遥かに耐久性がある。子どもたちが使っても壊れる心配がなく、繰り返し行われた「子供の人形座」の公演にも使われていた。

内山や山内の人形劇普及活動は戦前だけで、戦後は私立幼稚園の組織作りへと情熱が移ってしまったが、ずっと人形劇に生きてきたのが松葉

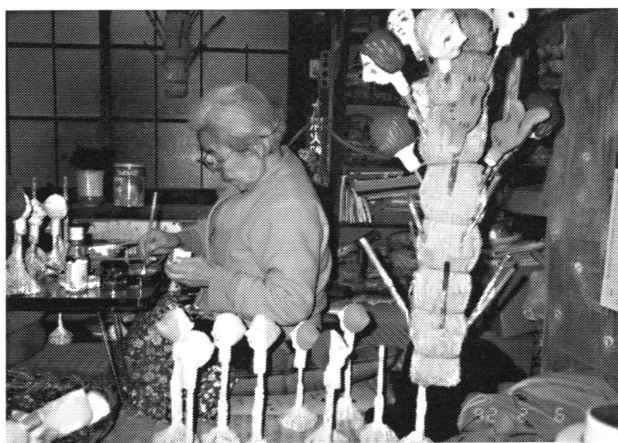


写真 11 人形の頭に彩色する故・延子夫人。手前は頭を干すために工夫した「わらずと」（平成4年2月6日撮影）

重庸氏である。

松葉氏の人形は、「移動人形劇場」時代と頒布用のものと二種類あった。頭の材料は、どちらも新聞紙であるが、前者は8等分に切った後、よくもんで首管に重ねていく方法。後者は、紙粘土に変えてから、石膏型で形を取っていく方法である。手管は、前者にはあるが後者にはない。

そして保育における人形劇は、大正12年の導入期「ふざけたことをする位に思った人」がいた時代から、25年の歳月を経て、昭和23年文部省発行の「保育要領」に「人形芝居」が入ったことで定着するようになったのである。戦後の新しい幼児教育を示した「保育要領」は、倉橋惣三、青木誠四郎、山下俊郎、坂元彦太郎が中心となって、作成にあたった。

その間、人形劇の普及に努力した人々は、身近な材料を使って人形作りを工夫しただけでなく、子ども向けの脚本もなかったため、自ら童話を脚色し演じていた。

彼らを支えたのは、保姆たちであり、衣装を縫って人形作りを手伝った妻たちであった。

尚、本文中、物故者の方につきましては敬称を略させていただいたことをお断りし、お詫びとしたい。

本研究にあたりまして、資料および人形の図をご提供して下さり、またご指導いただきました本学の山内昭道教授に深く感謝の意を表します。

また、本研究の一部は、山内昭道教授との共同研究として日本家政学会第41回大会において発表いたしましたことをお断りいたします。

註

- 1) 人形劇に使用する人形のことを「劇人形」と専門家はよんでいるが、本論では「人形」と表現する。
- 2) 斉藤尚子：保育における人形劇の史的検討——1. 保育に人形劇を導入した倉橋惣三——東京家政大学研究紀要、29 63—69 (1989)
- 3) 斉藤尚子：保育における人形劇の史的検討Ⅱ——内山憲尚による人形劇団の創設と普及活動——東京家政大学研究紀要、30、73—80 (1990)
- 4) 斉藤尚子：保育における人形劇の史的検討Ⅲ——雑誌「保育研究」によって普及活動をした山内勇仙——東京家政大学研究紀要、32、91—99 (1992)
- 5) 松本尚子：日本保育学会第45回大会 (1992) にて口頭発表 保育における人形劇の導入と展開についての史的検討 4、人形劇に生きる松葉重庸
- 6) 菊池ふじの・徳久孝子：倉橋惣三監修保育叢書1 幼児のための人形芝居脚本、フレーベル館 (東京)、1930 序のp.1

- 7) 註(6)の p. 2
- 8) 註(6)文献の三版（昭和7年9月発行）にカラー写真で掲載されていたものを転載
- 9) 内山憲尚：一人で出来る人形劇脚本集 附人形の作り方、片井商会出版部（静岡）
1949 p.175
- 10) 「指遣人形劇の製作と演出」では「胴着」
- 11) 註(9)の文献 p.174
- 12) 註(9)の文献 p.176
- 13) 「指遣人形劇の製作と演出」の口絵に掲載
- 14) 図4、7、8、13、14、は山内教授が描いたもの。図13・14の人形は、本学保育内容
研究室で昭和40年代に購入したもの
写真1、5以外は筆者が撮影した

参考文献

- 加藤暁子：造形のドラマ 人形劇の可能性を探る 演劇と教育、晩成書房、1995、3月号
- 坂元彦太郎：倉橋惣三その人と思想、フレーベル館（東京）、1976
- フレーベル館：フレーベル館70年史、1977
- 内山憲尚：幼児と共に五十年、日本童話協会出版部（東京）、1975
- 日本童話協会：復刻版・童話研究、久山社（東京）、1988
- 内山憲尚：お話と人形芝居、フレーベル館（東京）、1944
- 内山憲尚：保育を生かす幼児文化総解、博文社（東京）、1964
- 山内昭道編集：亀戸幼稚園創立七十周年記念誌 1987
- 「保育問題研究・児童問題研究」復刻刊行会：保育問題研究、白石書店（東京）、1979
- 松葉重庸：人形芝居と保育、白眉学芸社（東京）、1974
- 松葉重庸：児童文化、白眉学芸社（東京）、1968
- 山内昭道：幼稚園における人形劇 戦後五十年、日本人形玩具学会誌 第7号 1995
- 川尻泰司：日本人形劇発達史・考、晩成書房（東京）、1986
- 富田博之：日本児童演劇史、東京書籍（東京）、1976
- 岡田正章・宍戸健夫・水野浩志編：保育に生きた人々、風媒社（名古屋）、1975
- 松葉重庸：随想老いて燦く、自費出版、1994